

2004年7月23日

第728回煙洲会

鈴木煙洲先生と横浜高等工業学校に於ける自由教育

－いかなる条件が「自由教育」を成立させるのか－

前田 一男（立教大学文学部）

発表目次

- I はじめに
- II 鈴木達治における自由教育観の形成過程〔割愛〕
- III 三無主義の教育的意図
 - (1) 三無主義の標榜と現状批判
 - (2) 「学」への嗜好と知識と人間性の調和 ー無試験ー
 - (3) 人間の価値の確認 ー無採点ー
 - (4) 「賄賂教育」と「失敗教育」への批判 ー無賞罰ー
 - (5) 訓練より「自覚」 ー三無主義の根幹ー
 - (6) 「名教自然」という思想
- IV 三無主義への学生の評価
 - ー【資料】「三無主義の教育」についての卒業生の回想からー〔割愛〕
 - (1) 三無主義教育や自由啓発教育への実感
 - (2) アンケート回答の実際
- V まとめ 〔参考文献〕

I はじめに

- (1) 『横浜市史Ⅱ』編纂のご縁
- (2) 1920年代の高等教育と2000年代の高等教育
- (3) 大学教育実践における横浜高等工業学校校の「モデル」
- (4) 教育史における高等教育での自由教育

II 鈴木達治における自由教育観の形成過程〔割愛〕

参考：2 鈴木校長の略歴『横浜国立大学工学部五十年史』（1973）

- (1) 家庭教育と児童期の学習
- (2) 自由教育観の基盤形成 ー青年期の同志社時代ー
- (3) 自由教育観の輪郭形成（一） ー熊本五高、東京帝大時代ー
- (4) 自由教育観の輪郭形成（二） ー仙台二高、広島高師、蔵前高工時代ー

III 三無主義の教育的意図

- (1) 三無主義の標榜と現状批判

◇三無主義・「本校は従来の採点的試験制度を断乎として廃棄致しました」（1921年10月 横浜高工開校式での教育方針の説明）と無試験・無採点主義を断言。

・「本校は教育の方針として自由啓発主義を採り、従来の試験制度を全廃し、強制的試験勉強より学生を解放し、自己の責任を重んじ、自発的の勉強に由り其の課程を卒へしめました故今日の如き盛典に際会し、其儀礼に相応しき各種賞品の授与、特待生優等生の表彰等は全然行はぬ」（「無罰無賞主義」 1923年3月 第3回卒業式にて）と無賞罰主義を実行。

◇自由教育の実践の背景

教育界一般への批判、具体的には「詰め込み主義、知識偏重主義、卒業証書万能主義」への批判。教育の改造が叫ばれているのに、教育の制度はもちろん教育の精神までも旧態依然として改善されていないし改善される見込みもない、具体的には試験は明治時代以来次第に深く根を張りめぐらし、そのなかで暗記と記憶を内容とする知育偏重の傾向が強まり、試験地獄が解消される見通しもなければ、試験制度が存続するかぎり知育偏重の弊も解消されない、ならば横浜高工で三無主義を以てその現実に対決（・横浜高工への入学試験も1928年3月から無試験制度採用）

（2）「学」への嗜好と知識と人間性の調和 ―無試験―

◇試験の教育的効果に疑問・試験は学ぶという営みが本来もっている楽しみを学生から奪う、試験が知識を詰め込む勉強を学生に強制する。

◇孔子が弟子の顔回を評価する理由；博識多聞であるからではなく学を好むからだとしている例から、曰く「すべて試験から解放されて、自ら好んで勉強し、更に進んで楽しんで勉強し得るならば、これに優るものはない」。「学校教育は学を好み、学を愛し、学を楽しむ習性を賦与するものでなくてはならない」（達治）

◇知識と人間味の調和の必要・人間味は知識を超越している、ただし知識をないがしろにしてでしゃばるのは野人であり、知識が人間味を無視して威張るのが官僚である、知識がすぐれそれに伴って人間味豊かな人が君子なのである、という意味の論語の一節に感銘 「試験制度は質〔人間味―引用者注〕を犠牲にして、官僚的人材を養成する機関に墮する危険が多分にある」「自発的修学は、独り真正なる学業の成績を収めるのみならず、又学生の品性陶冶に影響する処至大なるものあらん」（「無試験無採点主義」1921年3月 開校式にて）

（3）人間の価値の確認 ―無採点―

◇無採点主義のもうひとつの意図

卒業時に、席次や成績を付して紹介する一般的な形式は、製造品に正札を付けて売り出すといった「もの」と同じ扱いではないか、という達治の批判。

・製造品なら正札が偽りであるかどうかはわかるが、人間の正札は容易に証明できない「自主と独立を名誉とする人間は、自己の価値を表示する正札を背負って、就職の門をくぐることは、変に感ぜられる。（中略）今少し人間性の尊重を考えないものか」。学校の正札は試験による採点にすぎず、しかも真の人物を評価するものではない（横浜高工では誰もが一番で卒業）。

（4）「賄賂教育」と「失敗教育」への批判 ―無賞罰―

◇形式的道徳主義を金科玉条とする懲戒主義への批判的实践

「賄賂教育」・品行方正、学業優等の学生を賞品や賞状を授与して賞する方法

「失敗教育」・停学や退学をもって学生を処罰する方法

「少数を罰して多数を懲らしめ或は少数を賞して多数を奨励すると云ふが如き方法よりも、之を懲らさず之を賞せずして、全校を挙げて相互理解に導き、自治自覚の下に教育し又教育せられる」（「名教は自然なり」 1925年3月 第3回卒業式にて）

◇文部省の「思想対策」の生徒主事と主事補設置要請に対する対応

・「生徒間に自治の精神が旺盛である限り、下手な主事や、主事補があると、却つて平地に波瀾を起し易い。官制があると、妙な責任観から何事かを目論見たい野心に駆られるからである」

◇無賞罰主義の背景；新約聖書からの影響

・姦淫の罪を犯した女性をモーセの律法によって石打ちしようとするパリサイ人に、イエスが「あなたがたのうちで罪のない者が、最初に彼女に石をなげなさい」といったところ、年長者から始めてひとりひとり去っていき、ついにイエスとその女性だけになってしまった。そこでイエスはその女性に「わたしもあなたを罪に定めない。

行きなさい。今からは決して罪を犯してはなりません」（ヨハネ伝第八章）

・「キリストは実に見事な無処罰主義の典範を後世に残し玉った」（達治）

・無処罰主義に徹することが「賞せず罰せず、和気あいあい、輝く希望の中に、切磋琢磨の道場を建設するのは、官公私立を問わず学校の特権ではあるまいか」

・《絶対弁護》

(5) 訓練より「自覚」 一三無主義の根幹一

◇「自由と云ふ意義」に注意を喚起・自由とは決して放縦の意味ではなく、もちろん気促になる傾向でもない、これを混乱したなら教育の目的、修養の効果がなくなるのみならず、反対の結果を生みかねない、と力説。

・「自覚」が必要（横浜高工の自由教育の根幹に触れる重要な意味）

「学校教育の第一義は訓練にあらずして、自覚にあり、責任に直面して自覚する、研究に対して自覚する。困難に対して自覚せしむるにあります。然して自覚の要諦は自由啓発の学風を樹立するにありと信じて居ります」

当時の学校が軍隊教育よろしく訓練だけに重点をおいており、訓練の行き届いている学校ほど優良学校と考える向きがあり、それは犬に芸を覚えされるに等しいもので、訓練が無意味であるというのではなくその前提にまず自覚がなければ教育的には意味がないのだ、という批判

・三無主義を支えるのは、ひとえに「自覚」であり、判断のともなわれない「訓練」ではない。

(6) 「名教自然」という思想

◇三無主義を教育方針とする自由教育の総称・「名教自然」と造語

「何かの拍子に名教自然と言ふ文字が頭に浮んだ（中略）言はば靈感」

「発達すべき天賦の才能、進歩すべき天稟の才能特性は、夫々各個人に宿つて居るものと信じて居ります。我自由啓発主義の教育は、是等天賦天稟の才能特性を阻害することなく、自由に其発達を促進せしむる、即ち名教は自然であると心得て只管努力した次第であります。麗かなる日光と、恵風慈雨を投げ与へた積りであります」（「名教は自然なり」 1925年3月 第3回卒業式にて）

◇「名教自然」の意味・戦後になって「名教自然は百貨店で、東京で云へば三越、横浜で云へば、野沢屋の様なものである。其処へ行けば、菓子類でも果物類でも、玩具類でも、子供の好きな何でも売っている。そま様に名教自然の中には、釈迦も、キリストも、孔子も老士も居る」

・教育学の学問的体系を構成する用語としてのそれではなく、教育の主体である生徒の「自覚」へ限りない信頼と期待とを寄せつつ、教育実践に臨んでの条件整備に徹する達治の姿勢ないしは境地そのものの表現

IV 三無主義への学生の評価

－【資料】「三無主義の教育」についての卒業生の回想から－〔割愛〕

- (1) 三無主義教育や自由啓発教育への実感・112名中106名（95%）
（実感がなかったとするのは、機械工学科と造船工学科の学生がほとんど）

- (2) アンケート回答の実際

- 【1】 入学試験について 【2】 三無主義の内実について
【3】 無試験機（械工学科や造船工学科と応用化学科との学生の反応との違い）
【4】 無採点（学生間のほのぼのとした交友関係を保障）
【5】 無処罰（「学生思想問題」への教育的な処置の意味－《絶対弁護》）
【6】 鈴木達治校長について 【7】 授業について 【8】 部活について
【9】 軍事教練について 【10】 自由自治の雰囲気 【11】 寮生活
【12】 図書室

V まとめ

◇「自由教育」を成立させる条件

- ・明確な教育方針が教官・学生ともに理解され、批判的精神が旺盛なること
- ・校長を中心とする人格的共同体としての学校であること
- ・受験生を多く集め過ぎないこと（独自の選抜試験が可能である受験者数であること）（入学してからの選抜を行わないこと）
- ・教育責任は知識を通じての人間教育を全うでき、絶対弁護の立場に立てること

〔参考文献〕（順不同）

- ・ 煙洲鈴木達治述「名教自然碑の由来と教育私見の断片」1957年4月
- ・ 鈴木達治「追憶 敬慕の記」1948年 ・ 鈴木達治述「煙洲残筆」1959年1月
- ・ 「同志社百年史 通史編一」1979年1月 ・ 「同志社百年史 資料編一」1979年1月
- ・ 煙洲鈴木達治述「自由主義教育の思出（無試験無採点無賞罰）」横浜工業会 1954年3月
- ・ 鈴木達治「入愚亭独嘯」1942年8月 ・ 鈴木達治「煙洲漫筆」 煙洲会 1951年2月
- ・ 「東京帝国大学一覧 従明治三十三年至明治三十四年」 1900年12月
- ・ 鈴木達治編著「自由教育十年 創立十周年記念出版」横浜高等工業学校 1930年
- ・ 鈴木達治述「自由教育の俤 無採点無処罰主義」横浜高等工業学校 1929年9月
- ・ 『自由の翼 煙洲会五百回記念』1986年8月
- ・ 「横浜高工時報」ほか

V 無試験入試の開始と終末

－『横浜国立大学工学部五十年史』（1978）を中心に－

(1) 入試の開始

14 第1回入学者 16 第2回目の入試－

(2) 無試験制度の導入

2 入試にも無試験制度を採用

「検定法は矢張り無試験だ 種々議論も出た」（『横浜高工時報』1930）

4 入学検定合格者発表

(3) 試験制度の復活

「検定の合理化を期し入試に筆記試験実施」（『横浜高工時報』1936）

19 入試に全科筆記試験を実施と発表

24 12年度入学志願者

2 志願者数激減

【資料】

「三無主義の教育」についての卒業生の回想

方 法：郵送によるアンケート調査（1990年1月実施）

対 象 者：1934年3月・1935年3月卒業200名（34年95名、35年105名）

有効回答数：112名（34年62名、35年50名） 回答率56%

回答数内訳：機械工学科34名、応用化学科30名、電気化学科18名、建築科14名、造船工学科16名

横浜市内中等学校出身者15名、神奈川県内中等学校出身者7名、東京府内中等学校出身者37名、その他（27道府県）53名（うち長野工、米沢工、岩手工、静岡工など工業学校出身者10名）

【1】入学試験について

「試験は口頭試問のみで、驚いたのは厳しい試験場を想像し、極度に緊張して試験に臨んだが、試験官の先生方は足を組んだり煙草をふかしたりしており、序列など全く分からず、極めてリラックスした雰囲気であった。これですっかりリラックスし、化学と関係のない電気機器についての自分の知識をとうとうと述べる事が出来た」（八七応五東）

「入学試験は口頭試問と伝えられていたので、どのように行われるのか見当がつかなくて稍不安な思いで試験場に臨んだ。試験場には三ヶ所にテーブルが置かれ、夫々三人宛の教官が受験生と対面して腰掛けておられ、先ず第一テーブルでは、当校受験の理由を問われ答えると、その答えをもう一度英語で答えるよう云われ即答させられた。第二のテーブルでは、多数の化学式の中からその物質名を聞かれ又触媒反応の意義及びその実例について問われた。第三のテーブルでは、数学の公式の誘導や証明などを即答させられた。全部終わると入口側中央部に置かれた机に移り、受験の感想文を書かされた。学力をチェックするのに、この程度の試問は致方ないものと思われた」（九七電五神）

「実際入学試験での印象は、各課目毎に一对一の対談の如きもので、知らぬ間に終わってゐたのである。例へば英語ではリーダーを無作為にひろげて、その一節を示され、そこを読み訳すこと、その他単語・熟語の二三の意味を問はれるだけであった」（九八電五東）

「受験生は『ひやかし』気分の者も多く感ぜられ、一応口答の試問は受けたが、あとは中学の成績で決めていた様に思われた」（一五機四横）

「面接時間が短時間でよかった。特に私は工業学校出で中学出より英語が劣っている様に常感じていたので、簡単に終わり助かったと思った」（八機四外）「身体検査を重視している様に見受けられた。口頭試問の中身が極めて簡単な為びっくりした」（二三応四外）

「試問も受験する側の緊張をときほぐすように配慮されて行われた」（二六応四外）

「面接試験だけで家庭について質問があり、ついで二三の日本語の英訳のみで、それも易しく、簡単な入学試験なので驚く入り、今も印象に残っている」（三七電四外）

「面接による簡単なテスト位で判定出来るものかと感じた」（四五電四外）

「入試では口頭試問のみで、よく入学できたものと我ながら感心している」（三四応四外）長野県飯田の出身者には「竜峡小唄」を試問したり滋賀県出身者には琵琶湖の網代木（アジロギ）を尋ねたりしていた。

「建築学科はデッサン（石膏像を木炭でスケッチ）が一日試験科目としてかなり重視された。各学科は口頭試問的にメモを読む様な調子で気楽に行はれた」（四七建四東）

「数学、物理、英語などの主科目は口頭試問形式で、教材の或る所を示し説明させる、その間質問が多く発せられ突っ込まれて返答に苦しんだ印象が残っている。こんなにいじめられては不合格だらうと沈んだ気持ちで試験場を後にした。しかし結果は逆で有望な受験生ほど（或る程度は内申書で選抜されていた？）試問時間が長く突っ込んだ質問を受けていた」（五五造四外）

「教授との一対一の口頭試問であった。物理の諮問で、問題を解いた処、試験官の教授から『出来た、出来た。よく出来た』とほめられたことが、今でも頭のなかに鮮やかに残っている」（六〇造四東）「昭和七年度の建築学科には受験生の希望に依って筆記試験（数学、作文）を受けられる道もあった。無試験では中学の成績が余程秀でていないと合格は困難と思われたので、この方を選んだ。入試では特に忘れ得ない事は、作文の課題が“日本文化の変遷を論ず”とは技術専門学校の入試とはおよそ意外の課題に驚きととまどいを感じた」（一〇三建五外）

「この試験方式は吾々の年度で終わり、次年度から筆記試験を選択出来る様になった」（七六機五東）

【2】 三無主義の内実について

「校舎はバラック、運動場は各部共通で、条件は決してよくなかったが、学生は皆のびのびとしていた」（三四応四外）

「校舎が関東大震災後のバラック建築であった事が、かえって自由教育と妙に調和してのびやかな教育の場という思い出として残っている」（五七造四東）

「入学当初従来の固い中等教育から脱し切れないで、如何にもダラシナイ教育法だと誤解したのですが、鈴木校長の君達には本校が最高学府で大学など進学する必要はないと自信に満ちて断言され、なるほどこれこそ個性を開発するに適した教育だと確信した」（四二電四外）

「中学校の同級生が横浜高等商業へ来ていた。それで話し合ってみて、高工の方が自主自由な面が多いと思った」（三二応四外）

「およそ官学としては創造も出来ぬ自由を満喫出来得た。これも校長の校是“名教自然”のあらわれ」（一〇三建五外）

「強制されることなく、自主的に勉学出来たこと」（七八応五外）

「権威主義、形式主義、差別主義、官僚主義、独善主義などを嫌う『愛』の教育であった」（六六機五横）

「専門教育に精励厳格な機械工学の教授たちが時に非常にやりにくそうであった事」（一五機四横）「機械科ではテスト、テストで実感は少なくとも無試験、無採点ではなかった」（六四機五外）

「鈴木校長の自由主義教育の思想の浸透は各学科毎に若干の差があり（教育方針に対する教授連の理解の差によるものと思うが）、その思想が最も良く徹底していたのは応用化学科であった」（八六応五東）

「応用化学の教授の方々は全部三無主義に徹していた」（二七応四外）

「自由主義教育が徹底していたのは応化だったように思える」（三六応四神）

「当時は五つの科があり、気風異なる学校の集合体の感じであった。私達の学んだ機械工学科では半数以上の教授がほとんど毎時間（二時間続きの授業のあとの一時間）テストと称し、筆記試験が行われた。応用化学、電気化学は全くテストらしきものは無く、よく運動しよくあそんでいたので大変羨ましく思った」（六三機五横）

「三無主義のため、学生全体がのびのびして居た」（一六機四横）

「東京府立八中も同様在学中無試験だったので、自分は入学時からこの教育方針に違和感を持たなかった」(五機四東)

「実感したが特に意外なほどではなかった。それは中学(芝中学校)がやはり無採点、無処罰、自治が基本方針だったから。むしろ大陸会などといった、野望増大思想のようなものが一部にあったのがいやだった」(一七機四東)

「入学前から三無主義は知っていた」(一八機四東)

「三無主義が徹底され定期試験はなく生徒の自発的勉学をきたいされたので、生徒はかえって自覚させられた」(二機四外)

「強制的な教育を受けたことがない。軍国主義の世の中にありながら、教練にも柔軟性があった。主義主張の異なった友人中、特に共産主義者に対しても同一の取り扱いが行われた」(二三応四外)

「押し付けがましい教条的指導は一切なく、自立的自由行動にまかせられていた。ただその自主的行動においては責任は自覚しなければならなかった」(九二電五横)

「クラスメート全員が非常に仲がよい様に思ふ。それは自由主義教育のお陰で点取り競争でなく、互助主義精神でお互いに助け合いの学生生活だったからだと思う」(九四電五東)

【3】 無 試 験

「学生は試験があるとその為に勉強する様になるので無試験とする、然し学生は卒業後は実社会では毎日が試験のような物であることを自覚して、自らの将来の為に自発的に勉学し、常に正しい判断が出来るように自らの教養を高めなければならない、とよく訓話されました」(六八機五外)

「前には良い点をとるだけのために一夜漬けの猛勉強をしたのであるが、この学校ではその必要が全くなかった」(二二応四東) この生徒は中学時代のガリ勉屋で狭かった交友関係もののびのびした三年間を通じて解消されたとしている。

「テストこそ無かったが毎日授業中に〇〇君と云って当てられる。その返答が出来ないようではまずいので予習は常に多忙であった(無試験であったが、よく進んで勉強した)」(八機四外)

「機械科の教授の授業の効果測定(一般のテストに当たる)の際、図書室の参考図書を見てもよし、仲間同志相談してもよし(但し、同じ答えは出ないようになっている)。ドイツ語の三井教授の場合、テストに辞書試用可、又卒業成績は本人の希望の評点にしてくれた(ふさわしい自覚はもってくれとの注意はあった)」(一一機四外)

「『無試験』については、公式には期末、学年末試験はなく、留年制度もなかったが、『テスト』と称して随時試験が行われた。出欠もチェックされていた」(三機四東)

「一年生時代の事だが、数学の先生が一度テストをしてみたい(先生はこのテストの結果をふまえて、今後の授業のやり方の参考に資するためのものだった)と用紙を配布されたことがあった。結局全員が白紙提出をした。こんな事があっても学校側からは何等の処置もなく波ひとつ立つことなく終った」(五〇建四横)

「学年末や中間に於いて、先生が突然〇曜の〇時間にTESTしますと宣告をうけ。試験される。学生が無試験方針に反すると抗議し教室に出席せずラグビーをやった事がありましたが、結局話し合いで決着し無処罰でした」(五九造四東)

「造船工学科においては、特に無試験。無採点というようなことはなかった」(六二造四東)「一年経ち二年経って各学年の単位がとれなくても進級出来たし、これが無処罰かと知るにおよんで、自由主義教育とは普段注意を与へて本人の注意を促し、処罰する事のない教育かと知らされたのである。しかし

ながら総括して三年終わりに全部の学科のとれない時は卒業證書はもらへず修了證書を与えて人生一生の教訓を与へた」(一一〇造五外)

「物理学担当の理博木戸潔教授のテストの時は、先生は教室にはおられず、本人の自主性にまかせた」(九三電五東)

【4】 無 採 点

「学期末、学年末の試験がないから、その分だけ遊べたし、又自分の勉強が出来た。その上席次がないので自分が何番になろうと劣等感もなく、級友一同、平等なつきあいが出来た」(二〇応四東)

「完全な無試験ではなかったが、他の学校のように試験期間というものはない。いつも採点されている状態と言った方がいいかも知れないが、勉強を強要されているという感じはなかった」(一四機四東)

「各単位科目を、仮に採点して総点数や平均点を算出したり成績序列を作ってみても、本人の学業や全人格の将来性になんの参考にもならぬことを感じた」(三〇応四外)

「学生を点数で評価するようなことはなく、したがって誰が一番だとか、自分が何番の成績だったかなどは関心がなかった」(五四建四東)

「成績の順位はなかったの、学生間の学業競争意識はなく、なごやかな学業・生活共同体の中で育つことが出来た」(一〇九造五外)

「就職に際しては会社から学業成績表の提出を求められるが、試験がないので成績表がない。先生と相談して、甲、乙、丙のランクで記入する。勿論甲が多い。成績順は一人で行く時は一番か二番、二人で行く時は一番と二番を記入した。会社に出された成績表はその時その時で違っていた」(八一応五外)

【5】 無 処 罰

「在学三年間を通じ生徒の処罰は一件もなかった」(二機四外)

「一年生の時、学友の一人が争議に参加したが、裁判が終わってから直ちに復学させられたこと」(三五応四東)

「クラス中に左翼派の学生があり、デモ行進中に虎ノ門署に拘留された。その生徒を鈴木先生が自ら引受けに行かれ、その後も何の処分もしなかった」(三三応四外)

「昭和六年秋、共産主義的活動に参加した学生に対する鈴木先生の誠に寛大なる処置、自由主義教育を鈴木校長が身をもってお示しになられたと当時感激した」(四八建四外)

「当時そういうことがあれば、一般的に退学、停学の処分は普通でありました」(五八造四外)

「他校ではこれらの学生を殆ど退学処分にしたが、横浜では一人も退学させられていない。鈴木校長は“道を誤った学生を正しい道へ戻すのが教育であって、それを放逐することは教育の放棄である”と言われた。三無主義は世間へアピールする単なる標語ではなく本当の教育理念であった」(六五機五神)

「官学では他に例がないのではないか。この問題で他校を追放された人の入学を許可し」た(八五応五横)

「学生の若気の至りもあり、時には街で乱暴をして警察のお世話になったりしたが、学校側は直ちに貰い受け、平静にしよりされたこともあり、後で処罰されるようなことはなかった」(五〇建四横)

「浜の早慶戦と言われた高商との野球に勝ち、応援の帰途、七〜八名の仲間と元気にまかせて伊勢佐木町を放歌、スクラム等で練り歩き、伊勢佐木署に連行された。校長の計らいで無事釈放となった。後で校長からの注意を覚悟していたが、事なくすんだ。ああ、これが自由啓発教育だなと思った」(七三

機五外)

【6】 鈴木達治校長について

「入学式の校長のお話で『今日から君たちは、学生服を来た紳士である。その自覚をもって総てに対処されたい』という意味の話を聞き、感激と希望に胸を膨らまし、これが自由啓発主義かと思った」(五八造四外)

「校長が毎月定期的に全生徒を行動に集め、広い視野に立っての時局講演をされ、いつも満員の盛況であり、生徒の物ごとの判断に対する自覚啓発に非常に役立った」(二機四外)

鈴木校長の講演の内容は、例えば「自由とは責任が重い事、三無主義の意味、男女問題に対する責任で始めて聴く話が全部だった」(四一電外)

「常に我々生徒に対し『君達は全国から選ばれて本学に入学したのであるから、既に紳士として世の人も認めているところである。従って各自の処し方は、自らを律し国民の期待に応えるよう行動すべきである』と諭された」(九七電五神)

「鈴木達治校長を通じて職業教育のワクを越えた处世訓を教えられた。全校生徒を前にした大演説(特別講義)で。六ッ川町の校長宅での座談(毎週一回面会日を決め、夜生徒はだれでも鈴木校長に会いに行くことができた)で」(五機四東)

「三年生になってからは足繁くお訪ねした。必ず紅茶とケーキが出た。五・一五事件には厳しい批判があった」(三二応四外)

講演について「その姿、その態度、その気迫、それは先生の姿、警咳に接して始めて実感し得るものであった」(二九応四外)

「鈴木校長は学生にも教職員にも慕はれるオヤジだった。テーブルを叩いて熱弁をふるわれた姿が忘れられない」(一一機四外)

「一年の時(昭和六年)だった。その時代は軍国主義が強まる一方で、時々共産主義者狩りが行はれていたが、その時は大規模な粛清が行はれ学生部門では本校の学生も数名の検挙者が出た模様だった。機を移さず、鈴木校長が壇上に立たれ之に対する話がなされた。今回の粛清にあたり、本校からも該当者が数名出たこと。私(鈴木校長)は当局へ出向いて学生の将来に互って一切の責任を負ふとの約束をして全員の身柄の貰い受けをしてきたこと。今この会場にその学生達もいること。そしてその学生は誰かなど詮索は一切しないで欲しい。平静にしていって欲しい。恩情あふれる熱弁が続いた。講堂のアチコチに感涙に咽ぶ声がきかれた。正に先生と師弟関係の極致であった。結局あとになっても、その時の数名の友は不詳のままだった」(五〇建四横)

「クラスメートが共産主義活動で警察に捕えられた時、校長自ら警察に受け取りに行かれた事は一生忘れられない」(二八応四外)

「当時一月元旦、紀元節、天長節は三大節といって学校では教育勅語と陛下の御真影を拝し式典が行われ、小学校は生徒に蜜柑やお餅が渡された。高工は三大節の式典はなく、在学三年間で入学式と卒業式だけ。それも入学式には入学したもの、卒業式には卒業するものだけ出席した。その時、校長が読んだ教育勅語は私製のもので書道家に書いてもらったものを二つ折りに表装したもの。よごれたら作り直せばよいと考えていた。当時の世相として、よくこうしたことが許されていたものと後から考える」(八一応五外)

「鈴木校長は自由主義者であっても、所謂自由主義者とは趣を異にしていた。どちらかと云えば右よりの自由主義者で、卒業式の際の記念講演者に荒木陸軍大將を選んだり、五・一五事件の軍法会議の判決

（首謀者数名に死刑）に対し、全校生徒を前に青年将校は日本の現状を憂いた純真さからおきたものであり、死刑に処すべきではないと述べる程だった」（五五造四外）

「自由主義と自由啓蒙主義とはいささか異なるように思います。啓蒙とは高工の学生として日本国民としてどうあるべきかを学びとり、それに向かって自分を律しながら精進して行くことだと思っていた」（五八造四外）

「私が卒業の年（昭和十年）、鈴木校長が学生全員を講堂に集められ、突然校長をやめるとハッピー用されました。私達は寝耳に水でビックリし、終わり頃にはあちこちすすりなきの聲が出始めました。それ程、全学生から慕われていたわけです。その時の一言が今もはっきりおぼえています。『人間は出処進退が一番大切である』…一生忘れることのない教訓です」（九九建五横）

「特に印象に残っていることは『まーちゃん（麻雀）亡国論』と『出所進退を明らかにせよ』の二つである」（七五機五外）

「昭和十年二月全教官と全校生徒を前に突如校長が退任の決意を表明されたのである。我々にとっては全く晴天の霹靂であり、特に一ヶ月後の卒業式をひかえてのこの仕儀には何とも納得致し難く、悲観の極に達した。校長は『六十五才を迎え且つ本校創立十五周年となった今、退任することが時宜にそくしたものであり、私自身“疾きこと風の如く”対処したことであり、願わくば諸君は“静かなること林の如く”対処されることを望む』と諄々と諭された。鈴木校長の卒業証書を授けられぬことを思い合わせ、唯茫然としてなすところがなかった。在学中の最も痛烈な出来事であった」（九七電五神）

【7】 授業について

「入学してわかったのは、東京高工（蔵前）が東京工大に昇格し、そこを志望する積りの人達が横浜に流れ、教授陣にも蔵前出または在職した人が沢山いた。教授陣き若く、主任教授の遠藤先生でも五十歳くらい。後は三十、四十台であった。博士論文の研究を進めている方が多い。各学科とも同じように若かった」（六七機五外）

「厳しかった。予習、復習は必ずしなければならなかった。それは予告なしに何時でもテストがあり、出来が悪いと教授室に呼ばれて御叱りを受けるのです。その反面、学生の事を温く思いやって頂きました」（七一機五外）

「教授が夫々の研究テーマを選んで研究熱心である姿を見て学生達の好奇心を自然と振興し教師に対する尊敬が湧いてきた」（六八機五外）

「毎日八時間授業で、自宅（東京御茶ノ水）通学のため遊ぶ余裕がなかったが、各学年四五名の少数のためと成績も判明しないため、各人との親しみは深まった」（七七機五東）

「高等工業で大学以上の学力をつけようと云ふのですから、毎日の授業は七時間八時間の割当てで、授業が終わって帰る時真っ暗でした」（一一〇造五外）

「中学校では各科目とも中間試験と本試験が毎学期あり、あくせくとそのための勉強に追はれたが、横浜高工では実にのんびりと自由にほんとの勉強が出来た」（一〇〇建五神）

「自主管理が出来るように自然になった。とにかく猛烈に勉強せざるを得ない雰囲気になっていた」（九五電五外）

「全体的に校長の教育方針が浸透していたようで、各先生方は夫々個性を発揮され、ノビノビと学生の指導にあたっておられた」（五〇建四横）

「修身の教科書が A meaning of Liberal Education であったこと」（五六造四外）

「各教授は専門に就いてほんとに詳しいと感心し尊敬した」（四一電四外）

「教科書に『原書』（微積分・水力学・機構学、機械工作等）を多く用いたので、最初は戸惑い辞書と首っぴきであったが、述語を覚え慣れると文章自体は比較的平易なことが判った」（一六機四横）「特に良かったと思うことは、各課目の教科書の大部分が外国語（英米有名大学の教科書）であり、演習問題が沢山あり、それを解くので内容と英五読解力がつき、外国のセンスに触れた」（六七機五外）

「与えられた実験台が勉強机であり、教授とは毎日毎時間触れ合いがあつて、指定の信頼関係が円滑であつた」（二〇応四東）

「実験に失敗しても二回三回とすることが出来た。自由に任かせて下された」（二四応四東）

「出席は採らなかつた。授業の雰囲気が常にのびのびとしていた。自主性と本人の自覚を重んじていた」（二五応四神）

「提出した Report について納得が行くまで discussion の相手をして頂けた」（二六応四外）

「毎日が明るく、気分良く出席と化学実験が楽しくできた。その化学実験は自分の手で出来た」（二七応四外）

「実験等時間的制約がなく運動部員だったので、練習後学校に出て実験を続けた事もあつた」（二八応四外）

「応用化学科は二週間に一回、水曜日の午後を社会勉強の時間にあてていた。京浜地区の工場から刑務所、裁判所など、最も印象が強くて今でも覚えているのは根岸にあつた横浜訓盲院で生徒たちのハーモニカの演奏にただ涙が出るのみであつた」（三二応四外）

「学問よりも学問の仕方を教えられた」（四〇電東）

「中村順平先生の天才教育に反対し一般高等工業並の教育を...と考えたこともあつた」（四七建四東）

「建築に対する情熱、その理念はすばらしかった。比例美を追及し日本美を愛した先生だった」（五二建四神）

「建築家としての自信と信念と誇りを強く持たれた情熱家だった。時間等にこだわることなく教育にあたられた」（五〇建四横）

「先ずギリシャ様式の柱の建築図画を各人の好みを聞いて選ばせ配構図を自ら画いて渡され、それを墨書きで陰影付けをさせられ、次に段階を追って出題され、作業中ご自分で手を下し直して下さった」（四九建四東）

「自由な時間、例えば夜間など教室に於て設計図を書く事ができた。塾のような教育方針」（五三建四東）

【8】部活について

「クラブ活動ではラグビー部に属し、日々の練習、終わって製図室へ帰って製図をしたりした。また夏期合宿等々、他の学科の諸君との交際は勿論、先輩諸兄の熱心な指導には今更乍ら驚きである」（一〇一建五外）

「クラブ活動では校友会新聞部に所属し『横浜高工時報』の編集に携はり、取材活動の為、校内各科の教授や校外の名士にも接触の機会に恵まれ、個人的に見聞を広めることが出来た。特に毎号に掲載する鈴木校長の随想『六ッ川夜話』の取材は最も楽しみだった」（七六機五東）

「クラブ活動では弓道部に入り、よく練習した。クラブ活動のよさは、技をみがくこと自体のほかに、先輩後輩とのつながりが貴重な体験である」（九〇応五外）

「クラブ活動を通じて学内の上、下級及び横断的交遊の関係が自然に出来た」（六八機五外）

【9】 軍事教練について

「軍事教練のスタートに於て全員が整列し、小隊長（学生の一人）が『気をつけー』『敬礼』の号令をされたその直後、井上貞衛教官（中佐）は『よーし。今日はこれでおしまい』と訓練を打ち切られました。吾々学生は軍事教練が無くなったことに歓声をあげて飛び上がって喜んだのは勿論です。スタート時の一同の緊張感を多とされたと思っております。さすが横浜高工での軍事教練は一味違った雰囲気であつたように思えてなりません」（二九応四外）

「年一回は必ず行われた軍事教練の査閲の折りも全校一致の機会であつた。鈴木校長は丸腰で水戸黄門ばりの長い竹の杖をついて寒風の中、三万坪野校庭に終始視て居られた」（六三機五横）

【10】 自由自治の雰囲気

「校舎のたたづまい。鉄門等が排除されていた」（六機四横）

「学校出入りの門は扉がなく、又守衛もおらず開放されて居り、一般人の構内通り抜けはじゆうであつた」（一六機四横）

「アカハタを持っていた友人が特高警察に見つかり逮捕された時、鈴木先生は学校構内で警察権が行使されることを拒絶され、当該学生が校門を出るのを待って連行した。鈴木先生はすぐ署に出向き、身柄を引き受け自宅で世話された」（二六応四外）

【11】 寮生活

「寮には寮監もなく、入寮者の自治運営で誠に和気藹々としていた」（三四応四外）

「寮（第一寮）生活にはとくに学校から『寮則』は示されず、学生の自治にまかされていた。寮内の自治は良好で和気あいあいとしていた」（三機四東）

「寮生活は全くの自治で門限は無かつたし、問題も起こさなかつた。交替で大蔵大臣を勤めて食事の献立をつくり『まかない』に提出して好きなものが作ってもらえた」（一四機四東）

寮の食事について「朝と夜のメニューは各人が一週間分の予定をかきこみ、賄さんが料理するという方式で、各人の個性、出生地、成長過程等が自然にわかつて興味ある生活がたのしめた」（一八機四東）